

『弱さの中の完全』(コリント人への手紙 第二 12章 1-10節) 2020.9.6.

<はじめに> この世では、「弱=悪・負」という公式がまことしやかに信じられています。自分を大きく強く見せようとする誇張に走る人も少なくありません。しかし、これにはすべての人がこたえられるわけでもありません。聖書には、この公式の発展形が書かれています。

I 誇りを賭けた戦い

①この手紙の背景

パウロはコリント教会へ遣わしたテトスを通して、その現状報告を受けて書いたのがこの手紙です。エルサレムの聖徒たちへの募金活動を励ますとともに、一部の人たちがパウロの使徒職に疑問を抱いていたことへの弁明のために、パウロはこの手紙を書きました。

②パウロが語る誇り

「誇る」「誇り」の語が、パウロの手紙13書中61回使われ、本書には34回出て来ます。特に10章以降に顕著です。彼への非難・攻撃の要約が10:10です。対するパウロは「もし誇る必要があれば、私は自分の弱さのことを誇ります」(11:30)と言います。

③何を誇るのか

私たちは何を誇り、何を恥じるでしょう。自分語りはその人の誇るところで、大方は労苦・災いです(詩90:10第3版)。パウロも折々に自分の証しを語ります(使徒26章、Ⅱコリ11:21～、ピリ3:4～、Ⅰテモ1:12～)。彼も私たちと同じなのでしょう。

II パウロの経験

①主の幻と啓示(1-6)

ある一人の人(2)と言っていますが、実はパウロ自身の体験談です。彼がパラダイスに引き上げられ、言葉に表せない幻と啓示を受けました。この経験は真に誇らしく、彼を奮い立たせたでしょう。しかし他人に誇ることで過大評価を受ける恐れもあり、詳細は語りません。

②サタンの使い(7-8)

証しは肉体のとげに移ります。パウロが抱える持病のことです。これによって主の働きが妨げられることが多かったのでしょう。だからサタンの使いと呼んでいます。しばしば邪魔をするこの病からの救いを、三度主に祈り求めるほど、彼は悩まされていました。

③祈りは聞かれるのか

神は祈りを聞かれる方です(詩65:2)が、すべてが叶えられていません。叶えられないのは私が価値無いから、祈りが足りないから、神がえこひいきされているからでしょうか。叶えられない祈りに信仰者は悩みます。神と人の思いは違うのです(イザヤ55:8-9)。

III 弱さを誇る

①主の回答(9)

弱さ・病を克服し、理想的で有用な存在へと変える力を神はお持ちですが、ここではそうではありません。人は神に力を期待しがちですが、主は十分な恵みに目を留めることを望まれます。弱さをあえて残して、私たちが神の恵みと力に期待することを意図されます。

②高慢にならないために(7)

正当な誇りは自分を支えますが、往々にして分を越えた高慢に及びます。パウロも例外ではありません。彼はこの病にもう一つの意味があることに気づきます。高慢から彼を守り、へりくだらせるために、神はあえてこの病を自分に与えられたと捉えています。

③弱さは神の現れる場面(9-10)

人が抱える弱さは悩ましく、歓迎できませんが、「弱=悪・負」という公式にキリストを加えると「キリスト+弱=強・有」となります。弱い私たちをキリストは愛し、恵みで包まれます。私たちの弱ささえ、キリストの力を実感する場面となり得ます。

<おわりに>キリストを知った私たちは必要以上に、限度を越えて誇る必要はありません。弱い自分をも愛して下さるキリストを迎えるなら、この方の力が完全に現れ、私たちの弱さも飲み尽くされます。だから弱ささえキリストにあって誇れるのです(H.M.)